

ことなのです。

「メディア」も例外ではありません。メディアは、特定の考えを現代文化の中に浸透させ、強化する文化装置です。メディアを通じて表現される世界観は文化をそのまま反映するのではなく、支配的な考えを促進します。番組や作品のなかでは警戒心を解く「自然さ」をもって支配的な考えが増強されるのです。

例えば1960年代のドラマ、映画作品等からは、女性は家庭的、従属的なものであるという価値観が、巧みな自然さで、視聴者に浸透していきます。

もちろん「ジェンダー」の捉え方も時代とともに変化し、メディアの取り上げ方も変化します。どのような組織が、どのような世界観を描き、その背景の歴史的文脈を読むことも欠かせません。そこから、メディアにおける「ジェンダー」についての支配的な考え」を読み解いていくことが大切なのです。

これからに向けて

メディアリテラシーの向上も図られてはきています。「男女共同参画白書28年版」では総務省が放送、ネット、携帯などメディアの特性に応じた教材の普及を図り、文科省でも子どもたちがメディアの影響を理解し主体的な対応力の育成を図ることが記されました。

メディアリテラシーというとメディアに対する批判的な視点が注目されがちですが、ステレオタイプは批判しつつも、新しい表現の可能性、未来への方向性を見つめることが大切になってきています。

(まとも桑山)

プリンセスストーリーの変遷

プリンセス(お姫さま)と

プリンス(王子さま)

私たちが幼いころ読んだ童話「白雪姫」や「シンデレラ」「眠りの森の美女」には、左枠のような共通点があるようです。

- ・王子を美しく迎える
- ・王子さまは姫さまの美しさに目で夢中になる
- ・二人が結ばれ、ハッピーエンドで話が終わる

この物語を読んだ女の子の中には、いつかステキな男性が迎えにくて結婚し幸福になれる、と思ってしまう人も多いのではないのでしょうか。

ディズニーのアニメは変化する

ディズニーのアニメ映画でも、1937年の「白雪姫」、1959年の

「眠れる森の美女」は女性の幸福は結婚であり、女性は家庭的、従属的なものであるように描かれています。しかし、1995年の「ポカホンタス」の主人公の女性はアメリカの先住民で、英国の開拓隊員と恋に落ちますが、二人は結ばれることなく終わります。主体的意思決定と行動力を持つた女性として描かれています。さらに2013年の「アナと雪の女王」では、姉妹愛と自立した女性の生き方がテーマとなっています。2014年「マレフィセント」は「眠れる

森の美女」のリメイク版で、プリンセスに呪いをかけた魔女の方が主人公となっていて、義理の親子が強い絆で結ばれることが描かれています。このようにジェンダーは常に変化していき、その変化にディズニー映画は敏感に反応しています。

日本の出版界は変化しない？

それと対照的なのが日本の出版界ではないでしょうか。書店の絵本コーナーに行くと、男の子の読む絵本、女の子の読む絵本と分けられていることも多く見られます。背表紙には、「考える力を育てる元気な男の子のお話」「やさしい思いやりをはぐくむ女の子のお話」「夢はかなう！あなたもプリンセス」と題され、女の子向けにプリンセスはピンク色のドレスを着ている絵が多く、絵本全体がパステルカラーで描かれています。

最近、外国で作られた女性を主人公にした映画の宣伝ポスターが、日本では原作のメッセージとは異なるイメージで作り替えられ、ネットメディアで話題になったこともあり、例えば、ピンク色を強調したり、タイトルの翻訳に「恋愛」に関することばが付加されたり、デザインにハートマークがつくなど。

日本のメディアも変化していくジェンダーに反応して、すべての子どもたちに夢を与える作品を作って欲しいものです。

(安井)



・親、先生に相談する
・ネット管理者に削除依頼をする、発信者情報開示請求をする
・電話相談(いじめ相談ダイヤル、法務省みんなの人権110番など)
・ネット相談(法務省ネット人権相談、WEBカウンセリングリング協議会、セーフラインなど)
・警察へ相談(名誉毀損、侮辱罪)
楽しいSNSライフのために
ネットで他人を傷付けない、自分も傷付かない子どもへ。キーワードは「想像力」。相手の痛みを想像し、どうやったら自分も守れるかを考えて行動できる子どもを育てていきたいものです。SNSは楽しく便利なもの、ネット・リテラシーを身につけより良いSNSライフを楽しみましょう。

(まとも成田)